

21世紀の日本国の姿

日本学術会議会長 黒川 清

「民主主義国」といわれる「経済大国、先進G8国」日本では常識でも、日本人以外には理解しがたいことがいくつかある。たとえば、第1に、この6年間、自殺死が30%増、しかも増加分は40-60代男性である。家族もあり、子供もいよいよという時なのに。失業、借金苦等で自殺する人は世界のどこにでもいるが、30%増という現象はほかの国であるだろうか。第2に、「過労死」。英語にもなっている。この行動は日本に特有だから、他に言葉がないのだろう。第3に、「天下り」という言葉である。大新聞でも日常的に「カッコ」なしに使われる。「普通」の言葉として認識しているのだろう。なぜ官僚を「上」と認識するのか。よその国でこんな言葉があるか。第4に、「自分」と「あなた」を表わす言葉がいくつもある。時と場合によって適切に使い分ける。「わたし、おれ、ぼく」、「あなた、おまえ、きみ」等。一つの価値観を共有する社会構造だから、自分と相手に対する言葉を使い分ける必要があるからいくつも言葉がある。日本語ではしばしば主語なしで文章が書かれる。言葉は社会的に大事だからこそつくられる。第5に、「人」は「人間」、つまり「世間の人」なのである。

日本は一つの共有される価値観の「タテ社会」として構成されてきたのであり、個人は存在せず、暗黙のうちに相互の立場を認識している。「形」による秩序形成の社会なのである。日本人の価値観とその本質は何も変わっていない。ところがいわゆる「グローバル化」時代とともに、「人間」の存在が「個」としてみられ

ているのに、国内では「人間」として認識している、認識したい。この「ズレ」を理解できない人が大部分だから、「バカの壁」がバカ売れする。だから例示したような不可解な行動と認識がある。



科学や技術の驚異的な進歩によって20世紀の100年で世界は激変した。第1に、16億の人口は4倍の60億余になり、そのために、第2に人の生活圏の広がり、エネルギー、食料、水、廃棄物等の環境負荷増と環境破壊、第3に、人口の80%が低開発、発展途上国にあつて情報と交通手段の広がりを受けて南北格差と不公平は大きく広がった。これらが21世紀の世界を動かす底流であろう。100年前の日露戦争を経て、18世紀から世界を支配したヨーロッパ文明に対して独立を果たした日本は、第2次大戦敗戦後の冷戦と日米安保、朝鮮とベトナム戦争の背景で経済成長し、世界第2位の経済大国になった。10年前までは、「ジャパニアズナンバーワン」「政産官の鉄のトライアングル」といわれて、何の疑問さえもたなかった。「一つの価値観」なのに「民主主義」と思い込んでいる日本。「リーダー」たちは文明史、国際史的に歴史を振り返り、歴史の延長上の21世紀の日本の姿を考える必要があるだろう。文明史的にはそれはみえている。